

## PMシンポジウム2010 開催のご案内

企業を取り巻く環境は、依然として全世界規模で厳しい状況にあります。そのような中で我が国でもパラダイムシフトを行い、世界級のエコ、スマート・プロジェクトの創出に成功している企業もあります。このような状況にあって、「新しいものを創る」こと、「プロジェクトを知恵を活用して遂行する」こと、「価値を創造する」こと、つまり「変化への挑戦」を実践することが、これからの社会に必要とされます。

価値の高いプロジェクトマネジメントに生まれ変わり、その先にある成長を見据えることが、国際社会の中で競争力をつけ、本物のプロジェクトマネジメントを実現するために重要です。

### 新しいものを創る

成長を続けるためには、新しいものを創り、価値を積み増さなければいけません。プロジェクト創造トラックでは、プロジェクトの創造者はどのように新しいプロジェクトを立ち上げているのか、プロジェクトマネジメントに対してどのような実践が期待されているのか、について考えます。

### プロジェクトを実践する

先人達に習い、新たな知恵を使って、より国際競争力のあるプロジェクトの実践が必要になります。各トラックでは、様々な業種業態でのプロジェクト&プログラムの実践事例を中心にご紹介いたします。そして、その経験をどのようにして次の成長につなげ価値を創造するか提言いたします。

### 価値を創造する

プロジェクトから価値を創造して、成長を継続することが大切です。CFP(公募に基づく講演)やワークショップ、更に「カフェ・ド・eシンポ」などの参加型シンポジウムを開催いたします。成長を継続するためのヒントをご提供いたしますのでご期待ください。

各種ポイントの認定対象となる—

# PMシンポジウム 2010

■CPU ■PDU ■PM教育受講証明 ■知識ポイント

## ■CPU

発給ポイントは以下の通りです。(1時間当たり2ポイントが基本となります)

- 1日目(全時間出席の場合)：10.5ポイント
- 2日目(半日講座)：5ポイント
- 2日目(1日講座)：10ポイント

CPU取得証明書を発行いたします。

## ■PDU

ENAAはPMI®認定教育プロバイダー(REP)であり、本大会は、メイン・シンポジウム並びに2日目のセミナー共にPMP®向けのPDU発給対象となっております。発給ポイントは以下の通りです。

- 1日目：5.25PDU
- 2日目(半日講座)：2.5PDU
- 2日目(1日講座)：5PDU

**注意** PMI®へのPDU申請は必ず一括で行ってください。(1日目・2日目を分割するとエラーになります。) また、PMP®資格認定試験受験用受講証明書も発給致します。

## ■知識ポイント(ITコーディネータ)

ITコーディネータ資格者には、協賛(後援)により、1日目は6時間30分、2日目は、半日講座はそれぞれ2時間30分、1日講座は5時間(4時間当り1ポイント相当(上限なし))の「知識ポイント」が付与されます。

## 1日目(9月9日) 午前

### 基調講演 1

10:00~

### 今こそ求められるイノベーション

共創のための「プロジェクトマネジメント力」の重要性



慶應義塾大学 理工学部教授

慶應義塾大学フォトリサーチ・インスティテュート研究支援統括者 横溝 陽一

内閣府の「最先端研究開発支援プログラム」に選出された慶應義塾大学小池康博教授の「世界最速プラスチック光ファイバーと高精細・大画面ディスプレイのためのフォトニクスポリマーが築くFace-to-Faceコミュニケーション産業の創出」の研究支援統括者として、産学連携での共創の視点でのプロジェクトマネジメントの重要性について語る。イノベーション・リーダーとして、過去にローソンのCIOとして実践したイノベーションでの成功事例についても講演の中で例として説明する。また、講演者が4月にローソンから慶應義塾大学に転身した契機となった2007年の慶應義塾大学の同窓会活動である連合三田会の福引部会での活動についても語る。

講演者は1990年代中盤にPMAJ(旧JPMF)の創設に関わった経緯があり、プロジェクトマネジメントには、当時の「構想されたプロジェクトの確実な計画・遂行のための組織・手法の提供という伝統的な役割」に加えて、今日ではまさに「変革を支えるメタ・マネジメントモデルとして、プロジェクトの初期段階からの活用機会が増えていること」を講演者自身の経験から、イノベーションフロントとしての実感をお伝えする。

**【講師略歴】**1979年慶應義塾大学機械工学科修士課程修了後、三菱商事に入社。86年MIT Sloan School MBA修了。米国ベンチャー・キャピタル勤務後、88年に三菱商事情報産業グループ帰任。米国ロッキード・マーチン社の子会社Formtek社のCALS対応の企業統合情報管理システムを核として三菱商事のSI事業として50社を超える大手企業にシステム導入を果す。PMAJの母体となった日本プロジェクトマネジメント・フォーラムの設立に関与・理事を務める。2001年より経営企画部でIT戦略担当し、02年に米国SCM大手のi2テクノロジー・ジャパンの代表取締役社長就任。2007年にローソンに入社し、常務執行役員CIOとして次世代ITシステム導入と全社業務改革に従事。本年4月より現職。

### 基調講演 2

11:05~

### 羽田国際空港におけるD滑走路建設プロジェクト

空港機能の増大を目的とした海上滑走路の建設



鹿島建設株式会社 専務執行役員 峯尾 隆二

羽田空港における4本目の滑走路は、国土交通省によって2005年3月に設計施工一括方式のもと発注され、ゼネコン6社、マリコン6社およびファブリケータ3社からなる15社JVで施工が進められてきた。全長2,500mの滑走路を2,020mの埋立部分、1,100mの棧橋部分を組み合わせた全長3,120mのハイブリッド構造体上に造成するもので、極めて高度の技術レベルが要求された。

設計は、現在得られる最高技術を反映させ、与えられた性能規定を満足する技術提案を行った結果、当JV案が採用されたものである。設計の基本として、本構造物が100年間機能保持するよう、各社が保有する最新技術を余すことなく用いて、さらにライフサイクルコストを常に念頭におくこととし、JV内に常駐する40名ほどの設計技術者と構成各社の設計部門との協同作業で、延べ約10万人日の人工をかけ実施した。

施工は、2007年3月に全体を9工区に分割し、3~4社/工区の各社がそれぞれ持分金額に応じた責任を分担する乙型施工を基本として実施してきた。工事全体を束ねる共通管理組織をその上に立ち上げ、工区と一体となったプロジェクト運営を行い、この8月末に無事竣工を迎えた。

本講演は、これまで余り実績のない新技術を軟弱地盤に対し適用し、船舶が輻輳する東京湾内、かつ供用中の空港隣接水域で、41ヶ月という極めて短工期の内に進めてきた羽田D滑走路のPMについて紹介する。

**【講師略歴】**東京大学工学系大学院土木工学科修士課程卒。1970年4月 鹿島建設株式会社入社 原子力室、福島第二原子力発電所工事。1980年5月 国際事業本部 NY駐在員事務所。1984年7月 土木本部 羽田沖合展開事業工事に12年間従事。1998年6月 東京支店 土木部長を経て、2000年7月 取締役東京支店副支店長。2004年11月 羽田プロジェクト専任。2005年3月 羽田再拡張D滑走路工事受注に伴いJV現場代理人就任。2009年4月 専務執行役員 現在に至る。この間、通算17年間、羽田国際空港関連工事に従事している。